

# 『ゴールドラッシュ』

## - 日本における家庭崩壊の物語と現実 -

王 暁梅

### 一、はじめに

一九九七年五月、神戸市で起きた少年殺害事件が異常なまでに全国の注目を浴びた。神戸市立多井畑小六年の土師淳君は殺害され、切断された頭部に挑戦状を添えて、彼の自宅からわずか八百メートルしか離れていない市立友が丘中学校の正門に放置された。事件の犯人は中学三年生の十四歳の男子であった。これが所謂「神戸酒鬼薔薇事件」である。

近頃、非行の低年齢化とか所謂普通の家族の子供の非行の増加などが喧伝されている。1998年末の老女強盗殺人事件の犯人の少年、東京、木郷で父親の振り下ろす金属バットで頭をつぶされた少年、拳銃を盗もうとして、警官を襲い重傷を負わせてしまった少年・・・なぜこれほどまでに青少年の非行、犯罪が増えているのだろうか。何が彼等を容易に犯罪に走らせるのだろうか。

戦後の日本は目覚ましい高度経済成長期を経て、日本人の生活は物質的に大きな変化があった。この経済の発展によってもたらされた目の前の豊かな生活はその反面で、精神的な面、人間としての心の問題を生みだし、現代の日本人が直面せざるをえない重要な問題になっている。地域社会の連帯が失われることで、青少年の問題行動や家庭崩壊、社会ルールの無視と言った諸諸の問題が起きている。子供達をとりまく社会環境は悪化の一途を辿り、いじめ、不登校、非行などの「少年問題」は益々深刻化している。低年齢化し、凶悪化・多発する未成年者の犯罪にどのように対応すべきか、日本社会は緊急な解決策を迫られている。

家庭の崩壊と青少年の心の荒廃、著しく進んでいる日本社会の事情を文芸界ではどのように捉えているのか。少年犯罪の事実をもとに、村上龍は「近代化の終焉」をテーマに『寂しい国の殺人』(シングルカット)というエッセーを出し、島田雅彦は『君が壊れてしまう前に』(角川)という小説で1975年の中学生の日記という形で提出し、「酒鬼薔薇聖斗」を主人公にした小説『14 (fourteen)』(幻冬社)が桜井亜美によって書かれた。そして、柳美里氏が『ゴールドラッシュ』を書いた。本稿は柳美里氏の『ゴールドラッシュ』を分析しながら、家庭崩壊の原因と実態を考察するものである。

### 二、『ゴールドラッシュ』の分析

『ゴールドラッシュ』(1998年11月発刊)の主要内容

主人公の少年は14歳。父親は全国展開するパチンコチェーン店の社長で、家はかなり裕福である。しかし家族はバラバラで、母親は新興宗教にはまり別居中。姉は援助交際をし、兄はウィリアムズ病でほとんど家から出ない生活を送っている。少年自身も有名私立中学に籍を置くもののほとんど学校には行かないで、近くの黄金町界隈をぶらつく毎日を過ごしている。少年は母から愛されずに育ち、支配的で金でものを言わせる父には憎しみの感情を抱いている。そんなある時少年は父親との諍いの末、日本刀で父を刺し殺してしまう。地下の金庫に死体を隠し、父親の経営していた会社の業務を引き継ごうと画策する。しかし、どれだけ頭をひねってもしよせんは中学生、大人と対等に渡り合えるわけもなく、助けを求めてあがいた末、それを知った恋人の響子に自首することを勧められて、そうしようかと思いついた。

14才の少年が父親を殺す。殺したからと言って別段罪の意識に苛まれるでもなく、死者の影におびえるでもなく、ただ殺害の事実をひた隠しにして、「自分は間違っていない」と呟く。14才の少年はなぜ平気で人を殺したか、彼は何によって救済されるのか。「ゴールドラッシュ」というテキストを読みながらその原因を探してみよう。

### 三、登場人物

#### 1、父（英知）

・「お前の娘を買ってやるって言ってんだよ！お前おれにいくら借金があると思ってんだ！」(P41)

・「英知は少年のていねい語に軽蔑が込められていることを察知していたが、もっとくだけた言葉遣いにあらためると言う理由は見当たらない、長男と長女はいないもの同然だから少年との間の溝にこれ以上深くするわけには行かなかった」(P61)

・「ときとして少年の肩をつかんで揺さぶり、同じ血が流れていると言うことをはっきりと分らせてやりたい衝動に駆けられたが、蓋がひらいて思いもよらない不気味な他者が現れるのではないかという恐れから躊躇せざるを得なかった。」(P61)

・「父親の声には何の怒りもなく、哀れっぽい恨みが語尾を持ち上げているだけだった。少年には父親が犬やゴルフクラブよりもっと高価なものを失ってしまいそうな不安に押しつぶされているように見える。この男に対して感じるものが軽蔑ではなく憐れみだったらいいのに、と少年は思う。プライドのない大人は排除しかない」(P61)

・「少年は息子に女をあてがうことが包容力で愛情だと思い込んで得意満面になっているこの男の品性の下劣さにうんざりした」(P131)

英知は父親として不器用な生き方をしている。その女との接し方、金や人の使い方、子供の育て方など、どれからもそんな印象しか読み取れなかった。英知は自分に何もなく、金と権力すら親から引き継いだものでしかない。だからその金と権力でしか息子に接することができない。しかし、父親が少年に与えたものはただの金と権力、跡とりという責任

と役割だけではないとも思える。もっと大きなもの、物を見る時の判断基準とか、概念そのものといったより深いものである。(世界は自分を中心に回っているはずだと、誰もが自分より格下だと少年は思ってしまう。少年は父親には軽蔑と憎しみしか抱かなかった。少年は英知を「父親」として認めたくないのに認めざるを得ない。おそらく、直感的に少年は自分と父親が同じであることを分かっており、だからかえってそう思いたくなく、父を憎んだのである。自分は父親じみている行動をとっている。父親に傷つけられ、父親と違う人間になろうとしてもなれない。だからそれを憎むのである。

少年は父親によってあまり早くに「おとな」にされてしまった。ところが、その一方で「子ども」でなければならなかった。少年は親に近すぎる場所にいる。職場、家庭、学校すら親の手の内に入る。少年はベガスと家庭と学校以外の社会を知らない。それなのにそれですべてを分かった気になっていて、そこで一生が終わるような、そしてそれが当たり前のように思わされている。金と時間と権力とにものを言わせて、その狭い世界でただいきがっているだけだ。

その狭い世界で、父親の英知は自分の子供達と真正面から向き合おうとはせず、何でもすべてを暴力と金の力で解決しようとする。おそらく、自分の子供との心の通った付き合いの仕方が分からなかったのだろう。コミュニケーションがなく、自分の子供は何を考えているか、何が欲しいのか分かぬまま殺されて死んでしまう。まさに悲劇そのものである。

## 2、母（美樹）

- ・よしずを引き上げた美樹は上体を反らして驚きの声を上げ、「幸樹かと思った」と右手を首に持っていき指をひらいてのどもとに押し付けた。わずかに光を帯びた目がすぐに翳り、落胆したというより声が聞こえる前の精気のない顔に戻っただけだった。(P183)
- ・美樹は入れともいわないですり足で部屋の中に戻った。
- ・少年は一度も見たことがない母親が掃除機をかける姿、スポンジでコップを洗う姿、雑巾がけをする姿を想像した。
- ・なにかおこった時に母親は自分を護ってくれるだろうか？母子の絆は蜘蛛の糸よりもっと細いように思える。(P184)
- ・「貪欲と憎悪と無知で穢れた悪業の巢には近寄れません」美樹の目にはじめて生きている輝きが灯った。  
「じゃあ、あなたは どうして そんなとこにぼくらを放っておいているんですか、自分の子供を置きっぱなしにして自分だけ逃げ出すなんておかしいと思いませんか」(P185)
- ・溺れかかった息子に救命うきわを投げロープを引っ張って岸に引き上げてやるのが母親としての務めだ、美樹は子宮筋層がかすかに動いたような気がして座り直した。この子にはなんの愛情も感じたことはないが、汚穢汚染から救ってやるのは最高の功德だ。(P188)
- ・自分たちきょうだいはこの女が家を出ていく原因になるようなことをなにひとつしていないということを

いまさらのように思い出した少年は憎悪に向かって急降下し、顔は赤みを帯び呼吸は浅く速くなり目は八歳のときに裏切られ見捨てられた時の怒りで光を放ちはじめた。(P189)

・「母親らしい感情をとりもどし、家に帰ってきてくれるかも知れないと淡い期待を寄せたのだった。」(P255)

・「産まなければ良かった、どう考えても悔やまれるのはこの世に不幸のかたまりを産み落としてしまったことだった。幸樹は別にして、あとの二人はさらに不幸な子供をつくり出すだろう」(P257)

・『子供なんて生んじゃダメ。地獄よ』発するつもりがなかった言葉が洩れてしまった」(P258)

美樹は英知に暴力をうけ、幸樹のウィリアムズ病は占い師によって「先祖が金に係わる大罪を犯した祟りだ」と言われたが故に金でよどんでいる黄金町やベガスに嫌悪を抱いている。美樹は「子供を生まなければ良かった」と思い、自分の生んだ子供の存在を消極的に否定しようとする。暴力や金によって傷つけられたが、子供には何の罪もないのに、彼女はその罪悪を避けるために子供達を育てることすら放棄してしまった。姉の美歩と少年の不幸を分かっているながらも、自分自身を無関係の位置に置き、他人事のように思うことで自分を傷つけるものから逃げる。とても考えられない母親である。

このような母親に対し、少年は八歳のときに母親に裏切られ、見捨てられという思いが有り、母親に複雑な感情を抱いている。その中で、憎しみが大部分であるが、やはり、子供として母親に対する自然な感情は捨てられない。いざとなるとまず思い出すのは母のこと。ほんの少しの希望で、少年は母親に助けを求めにいった。しかし、そのほんのすこしの「愛」の芽生えも母親に砕かれた。それゆえに、少年は「愛」というものが信じられなくなり、金の世界に閉じこもったのである。

### 3、金閣、サダ爺、シゲ婆

・「孫だよ」(P21)

・「自分の身に災難がふりかかり、たとえ死に瀕しているとしても、自分は少年の話に耳を傾けるだろう。少年がどういう状況に立たされても、どんなことをしてもかばいもしなければ拒むこともなくただ受け入れる、そうここに決めていた」(P24)

・「老人にとっては唯一無二の無垢なるもの」

・『安全なんだ』少年は微笑んだ」(P27)

・「布団に横たわっているのは母親だった、少年には母親に見えた」(P31)

金閣は少年が「こども」でいられる場所である。その場にいることで浄化されるような気持ちになれる。それはそうすることを期待されている場だからなのである。サダ爺が少年を「無垢なるもの」と思っている限り、少年は「無垢」でいられる。サダ爺、シゲ婆

は少年にとってまるで親的存在である。この家族のような存在があったからこそ、少年は本当の親から与えてもらえぬ愛情の片りんを感じることができたのである。しかし、少年は本当の愛が分からないのである。親に愛されていない少年には愛とはどんな形なのか、それに愛の意味が分からないのである。サダ爺やシゲ婆が自分のすべてを受け入れるのが分かっており、それに対して何とかしてあげようと思ったのも確かなこと。が、金ですべてが解決できると教えられた少年にはお金でしか気持ちを表せなかった。シゲ婆がいなくなり、焼き場に行く時、「一万円紙幣のしわを一枚一枚でていねいに伸ばして袋（香典袋）に収め制服のブレザーの内ポケットにしまうと、満足げなため息を吐き出した」。少年には多額のお金を出すことによって自分のシゲ婆に対する愛情を表せると思い込む。金によって作られる人間関係の中で育てられた少年には、当然の方法かも知れない。が、サダ爺にはおかねは必要ではない。世の中に金よりもっと重要なものがあるとサダ爺は思うのである。しかし、少年には通じない、そして少年はそれを拒否する。

#### 4、金本

・「金本は昼間ベガスの従業員から、弓長が行方不明になったと聞いた瞬間、少年が殺したと確信した」  
(P220)

・「金本は胸騒ぎを鎮めることができなかった。自分が囚われているのは恐怖ではなく絶望という、もう三十年ほどは忘れていた感情だ。（中略）淋しさや虚しさにしばらくつきあっていればそのうち忘れることができる。あきらめと倦怠に揺られて動かすにいればそのうち終着駅にたどり着く、そう考えていた。金本はぜつぼう、とつぶやいていたが赤の他人に過ぎない自分がなぜ絶望しなければならないのか合点がいかず、錆び付くほどつかわなかった脳をたたき起こして、なぜ自分が絶望しているのか考えてみようとした」  
(P221)

・「おれは怖いんだよ、いったいどうなってんだ、こんな歳になって何のために生きてんのか分からなくなるなんて、冗談じゃねえってんだ」(P224)

・「ひとを殺しちゃいけないよ、それがわからなきゃ死んだ方がまだ、なぜかって？なぜか、子どもってのはおとなにとって過去であると同時に未来なんだ、先のことはわからねえけど、知りたいんだ、占いたいんだ、てめえがいなくなった先の未来をガキの中に見て安心してえんだ」(P225)

金本の存在は特別で、何となく優しい感じがする。ヤクザの金本にも少年は無垢で、金でよどんでいる「黄金町に似合わない存在だ」と思われている。少年のことを思い、少年のために何とかしてやる。「子どもってのはおとなにとって過去であると同時に未来」という。少年の中に未来というものを見出せると彼は思っている。自分は家庭を持たず、そして持つ資格もないという思いもあるが、少年によって息子に対する感情が湧いてくる。つまり希望を金本は少年の身に託すのではないか。自分がやれなかったことを少年がやってくれれば。金本は少年に普通の生活を持ってほしい。しかし、少年にはそういう理屈が

分かってもらえない。逆に、少年は自分を支えている価値観、世界観を全てひっくり返すことができない。そして、拒否してしまう。だから、金本は絶望を感じる。自分を否定されたように立ち眩む。

金本は少年にとって父親的な存在のように思える。少年には分かっていないだろうが、少年の心の中に密かに父親の愛を期待しており、本当の父から愛してもらわなくても、金本から暖かみを感じることができる。だから、困った時にまず思い出したのは金本のこと。でも、大人の金本と接する時も金本の心をつかむためにお金を使おうとし、少年は金本とのコミュニケーションも遂には金の交流に過ぎなかった。

柳美里氏は在日韓国人二世であり、中学時代にいじめを受け、中退した経験を持っている。自分自身の家庭も母親が家を出たことで、十年以上前に離散している。日本社会の家庭崩壊の流れに身を置き、同じ経験を基に、柳氏はずっと「家族」を主題にして書き続ける。「ゴールドラッシュ」という作品が神戸の少年が引き起こした事件を思い出させるようなショッキングな内容である。これも現実と緊密に繋がっていると見えよう。

#### 四、日本社会家族の実態

五十年代に日本の高度経済成長が始まり、住居の団地化や核家族化が進んで、家族が小さな箱の中で暮らすようになった。地域共同体も急速に崩れていき、急激な人口移動によって地域的なつながりの殆どない新興の住宅や団地が次々と誕生していった。昔は子供達は地域共同体の中で、その中のルールを学びながら自然に育っていき、家庭は地域社会に支えられていた。子供の教育に、地域社会が元々大きな役割を果たしてきたのであるが、その解体によって、子供教育にも空白が出てきた。

高度経済成長期を通じて日本の社会変化が急速に進み、その中の家族をとりまく状況だけでなく、家族のあり方そのものも大きく変化してきた。現代の多くの家族が核家族、少子化という特徴を持っている。核家族化は1960年から急速に進んできたという。高度経済成長と共に、核家族の比率は1960年の64%から1985年の76%へと飛躍的に増加している。家族の小規模化にしてみれば、1920年から1950年までの30年間の平均世帯規模は、やや微増の傾向にあるが、ほぼ五人弱で安定している。ところが、1950年から1980年までの30年間に、4.98人から3.33人へと急激な減少を示している。急激な経済成長のもとで、小家族化が著しく進んだのである。家族が核家族化し、小規模化し、周囲との交流を拒否して孤立化し、密室化しているだけに問題がこじれ、破局を迎える危険性も大きくなったといってもよいであろう。家族の一員が問題を起こしたとき、カバーする人も、支援の手をさしのべる人も少ないからである。

こういう状況の中で、父親と母親の役割も変化しつつある。統計によると、日本の父親は家庭で家族と向き合う時間が一日に十七分しかないという。「会社人間」となって働く

夫が、残業や通勤時間の増加の中で時間とエネルギーを使い果たし、家族との関係をおろそかにする事例は、枚挙にいとまがないほどである。その結果それが夫婦関係や親子関係に支障をきたす原因となることが多い。「父親不在」あるいは「父親の権威喪失」ということが、屢々指摘されている。父親（夫）にゆとりがないために、家庭生活の中で腰を据えてじっくりと本来の役割を果たすことができにくくなっている。さらに、会社人間としてではなく、ひとりの人間として自分自身の生き甲斐を追求することが難しくなっていることである。

母親の場合、普通は父親が毎日通勤し、母親は日中もっぱら家事と育児に時間を費やす。家が狭く、家庭電気製品が整っていると言う状況で、日常基本的な家事労働には大して時間がとられず、母親がついつい子供のことにだけに注意を集中させる。子供は狭い住居の中で、ほとんど母親とのみ密接に接触し、閉鎖的な特殊な人間関係しか体験しないままに成長してしまう。

こういう現実の中で生まれ育った少年達は「自分に忠実に生きることを大切にする」との見方が増えている。自己実現や自分の満足、成長に対する関心が益々肥大してきている。わがままや利己心を押さえて、人間の生存と幸福のために尽くしたいと言った意欲のある若者は少なくなったように見える。現実には、自分の「衝動に」忠実なのであって、思い通りにならなければ母親に八つ当たりし、殴打して傷を負わせるのが家庭内暴力の実態である。

## 五、おわりに

小説には、成り金の父親が構えた高級住宅地の豪邸、貧困と犯罪の渦巻く低地の妖しい街区、そこに、摩擦が生じ、暴力が突発し、家庭は崩壊している。『ゴールドラッシュ』は壮大にして、暗鬱な悲劇の立体的な空間を開いてみせた。小説はフィクションでもありながら、現実社会と厳密に結び付いたものでもある。思春期に於いて「自分の存在は何なのか」という困惑、親の不和と離婚による機能不全の家庭、自分を好きになれる基盤の欠陥、親に愛してもらいたい気持ちが密かに複雑に存在する小説の主人公の少年も現代社会に於て問題を起こした少年も一緒なのである。これからの家族のあり方、痛んだ社会に我々はどうすべきか、現実を小説に取り入れ、「家族の解体とそこからの再生」に対して、柳美里は自ら答えをさがそうとしている。

小説『ゴールドラッシュ』では最後に少年の家族がまがりなりに「一つ」であった幸福な時代の写真をモチーフにして、その中にわずかの光明を見い出そうとしているように感じられたが、未だ確かな答えが見つけられていないようである。だからこそ、作家は今後も現実社会を見据えつつ、家族をテーマにした小説を書き続けるのであろう。

## 参考資料

『核家族時代』 松原治郎（NHK ブックス）

『家庭崩壊』 片山義弘編（同朋社）